長谷寺かわら版
百日紅
92号
2015（平成27）年
8月1日

高野山との出会い
空海と祐信

☆開創法要

今年は、高野山が開創されて1200年。これを祝う法要が、大師がいまもおわすという奥の院と大伽藍で、厳かに営まれました。

奥之院までお練り。捧げる櫃には、檀信徒の書いた写経が納められています。

法要は4月のはじめから50日間の日程で行われました。なにしろ全国から僧侶や信者さんたちが集まりますから、地域ごとに日程を割り振っての開催。わが阿波支所は、高知支所とともに、4月17日の奥の院での法要に参加しました。

鳴門結衆からは総勢約200人が6台のバスに分乗。長谷寺の参拝団は45名。うちの仲間たちにとっては、4年をかけた四国霊場巡拝を、無事に結願できたお礼参りも兼ねての参拝です。

ちなみに、今年2015年が開創1200年とされるのは、空海が嵯峨天皇から高野の地を賜ったとされるのが、弘仁7年（816年）のことだったからです。

開創といえば、すでに諸堂や寺の体制が完成していたのだろうと思われるでしょうが、決してそういうわけではありません。当時高野の地にあったのは、地主神を祀る祠程度のものではなかったかと考えられています。下賜の勅許後、空海は弟子たちを高野に向かわせ、開墾と整備に着手しました。

いわば、この年を起点に高野山での寺造りが始まったわけで、高野山ではこれを開創としています。ちなみに、空海自身が高野に登ったのは、この2年後、弘仁9年のことでした。巨大な塔や諸堂の立ち並ぶ山上伽藍に佇むと、伽藍整備の苦労が偲ばれるような気がします。

今回の法要の記念事業のメイン企画のひとつが中門の再建。金堂の前に建つ中門は、天保14年（1843年）の火災で焼失し、礎石だけが残っていました。実に170年ぶりに再建が叶ったわけです。

☆開創説話

散文的な歴史的事実は別にして、『今昔物語集』をはじめとしたいくつかの説話の中で語られる空海と高野山との出会いは、いともドラマチックです。

唐に渡り、都の長安で師の恵果から密教を受け継いだ空海は、帰国の船から、密教道場に適した地を指し示すよう祈りを込め、日本に向け三鈷杵を投げました。

帰国したのち、その三鈷杵を探し求めていた空海は、大和国の五條付近で、二匹の犬を連れた狩人と出会います。狩人はその場所を教えようと犬たちに案内をさせます。

犬を追って紀ノ川のほとりに至った空海は、ここで出会った山人によって高野の地に導かれ、そこで松に懸かった三鈷杵と再会します。まさに高野山こそが、三鈷杵の示した地に他なりませんでした。山人は高野山の主であると名乗り、高野の地を空海に与えます。

空海を高野に導いた山人は丹生明神の化身、犬を連れた狩人は高野明神の化身で、空海は後に高野山にこの両明神の社を造り、祀りました。

三鈷杵は飛行三鈷と呼ばれ、いまも高野山の宝物ですし、その懸っていた松は「三

再建された中門。このむこうに金堂と根本大塔。

飛行三鈷杵（重要文化財）
高野山の３大秘法のひとつとされています。

鈷の松」として高野山の観光スポットのひとつです。

☆説話の背景

しかしこの開創にまつわる説話は、後世に創作されたフィクションには違いありません。船から投げた三鈷杵が高野山まで届くはずもないし、高野の地を神から賜ったというのも荒唐無稽な話です。偉大な宗教者ですから、神に遇うことくらいできたのかも知れませんが、空海自身はその膨大な著作のどこにも、そんなことは書き残してはいません。

彼が書き残しているのは、高野山は、少年の頃に歩いたことのある地だということだけです。恐らく当時から高野山は、山林修行者たちの登る山岳霊場のひとつで、空海も若い頃、修行者として踏破した経験があったのでしょう。

三鈷杵といえば、密教では欠かせない法具です。説話の作者が高野山開創の物語にこれを登場させたのは、高野山にかける空海の願いをシンボライズするためだったのでしょう。

また丹生・高野の両明神から高野の地を賜ったというストーリーにしたのは、想像を絶する困難を伴ったはずの山上の伽藍建築に、物心両面からの協力を惜しまなかったであろう地元の丹生一族の労苦に報いるために、彼らの祀る神たちを高野山の主として登場させたのではないか。そして、先述した、開創前から高野の地にあったとされる「地主神を祀る祠」こそ、丹生明神を祀る祠だった。また、この神の依り代（神木）が松であり、そのために、空海の願いをシンボライズする三鈷杵と関わらせて、松を開創説話に登場させることになったのではないかというのが、新しい研究の説くところです。

☆得度

私が初めて高野山に登ったのは、1983年の初夏。20代最後の年のことでした。速いもので、あれからもう32年の歳月が流れました。

どういうご縁か、大学のキャンパスで出会った、鳴門の寺の娘と結婚しました。その翌年、「縁を結ぶため」と義父（先代住職ですね）に請われて、高野山で得度をしました。

得度は、「出家」と同じ意味で、お坊さんになることです。当然、髪も落とさなきゃなりません。しかし当時私は、大阪の府立高校の教壇に立っていました。剃髪して教壇に立つことなど、当時の私にはとても考えられないことでしたから、有髪＝髪を伸ばしたままで式に臨むことになりました。式には、有髪の人も幾人かはいたものの、ほとんどは剃髪した僧形でした。

式場は、大師教会という施設の奥にある、授戒堂という、いかにも有難げな空間です。その剃髪の入門僧たちは、ロボットのように、頭にボタンが3つ付いています。よく見ると、ボタンに見えたのは、頭頂と両耳の上あたりの3カ所にわずかだけ残した頭髪でした。得度式では、これを剃り落すわけです。落とした髪は、大切に奉書のような紙に包み、胸元に仕舞います。

なんとも不思議な世界に迷い込んでしまった思いと、戸惑いの中にたゆたっていましたので、この時の記憶は、はなはだ曖昧です。

そういうわけで、姿形はともあれ、得度して坊主になり、祐信という戒名も付きました。しかし少なくともこの時の私には、寺を継ぐなどという気持ちは、これっぽっちもありませんでした。

☆山歩き

２度目に高野山に登ったのは、とある山岳会が主催する山歩きの会に参加したとき。なにしろ薄給の地方公務員でしたから、休日のレジャーにもあまり経費をかけらけません。手作りの弁当を持って、夫婦ふたりで国鉄（！）に乗り込み、関西圏をぐるっと一周して戻って来るだけなんて、貧乏臭いこともしました。

この高野トレッキングで、どんなコースを歩いたのかはよく覚えてはいませんが、奥の院や金剛峰寺にお参りしたという記憶はありません。

ただ、大阪時代は、なにしろ教員ですから、夏には長い休みが取れました。ですから、抵抗を感じながらも、盆経を手伝わされたりしました。

そうこうしているうちに、本人の意図に反して、糸にかかった蝶（蜻蛉でもいいですが）が、蜘蛛に絡め捕られるように、寺とのしがらみから逃れにくくなりました。檀家さんたちからも次第に、長谷寺の後継ぎという目で見られるようになりました。

☆受験生

いずれはこの寺を継がざるを得ないのかと覚悟を決めたのは、高校は自分がいなくても困らないけど、長谷寺は困るのかなどと、うかつにも思ってしまったせいです。

しかも住職になるためには、高野山大学で学ぶ必要があります。たとえ未知の仏教学でも、そしてそこが高野山でも、再びキャンパスに戻って学べるのは魅力でした。

いまほどではないにしろ、教育の現場はひどく多忙でした。また教職員組合の役員もしていましたから、帰宅するのは決まって深夜。帰ったら食事をして寝るだけの毎日です。ゆっくり読書をする時間もとれませんでした。

高野山大学の学部に編入するという方法もありましたが、別の大学ですが、まがりなりにも大学院の修士課程を終えていましたので、大学院に進むことにしました。「しました」とはいっても、入試という関門をパスする必要があります。

仏教に関しては、これっぽっちも知らなかった（そういう人間が、盆には檀家さんの家に拝みに行っていたわけで、ありがたくもなんともない）ので、大量の書物を買い込んで、教員の仕事の合間に、職員室で受験勉強をしました。しかし、空海と真言密教に関して最も参考になり、試験の役に立ったのは、専門用語をちりばめたあまたの仏教書ではなく、司馬遼太郎の小説『空海の風景』でした。

大学院の入試の日は、府立高校の入試の翌日でした。高校入試の採点を終え、タクシーを飛ばして飛び乗ったのは、南海高野線の高野山行き最終電車でした。ケーブルに乗り継いで山上に着き、待っていた最終バスに乗り込んだのは、私ひとりだけでした。

しかしそのバスは、目指す宿坊までは行ってはくれず、みぞれの降る中、トボトボと暗く寒く、人気のない道を歩きました。この寂しい後ろ姿が、人生3度目の、しかもまだ酷寒の高野山でした。

☆再びの学生生活

幸運にも入試にパスし、高野山に移り住んだのは1988年、33歳の春4月です。入学式の朝は、なんと雪でした。

10歳以上も歳の離れた学生たちとのキャンパスライフ。しかも宗門の大学という特殊な環境は、戸惑うことばかりでした。

宗門の大学ですから、大学の単位とは別に、僧侶の資格を得るためのカリキュラムがあり、メインは加行と呼ばれる100日間の修行です。夏と春の、大学の長期休暇の期間中の50日ずつがこれに当てられていました。

私は、夏は寺の手伝いがありましたから、2度の春休みを利用して、修行をしました。この道場に入ったのは翌'89年（平成元年）の2月です。

この前月に先代の天皇裕仁が逝去し、高野山でも盛大な追悼法要が行われました。そのために修行の開始が1週間ほど遅れました。しかし、春の大学の開講を遅らせるわけにはいきませんから、50日の日程は1週間ほど短縮されました。だからといって、決められた修行のカリキュラムを省略するわけにはいかないらしく、本来は2週間かける修行課程を1週間でやってしまうという、いとも過酷な事態になりました。

五体投地と呼ばれる、全身を床に投げ出して、100度の礼拝を幾度も繰り返すという、体力だけが頼りの荒い修行と、慣れない正座とで、すっかり足を痛めてしまい、3日に1度の奥の院までの参拝では、片足を引きずりながら、みんなからずいぶん遅れて歩きました。この時痛めた足は、四半世紀経ったいまも、治らないままです。

加えて、修行のストレスで、十二指腸潰瘍になり、しばらく通院をしました。身も心もボロボロになった修行の話は、「百日紅」45号でも詳しく紹介しました。

奥之院燈籠堂で行われている開創法要のシーン。告白すると、ひどく歩きにくい「鼻高」という履物をで練り歩いたあとなので、正座がとても辛かった。

修行を終えたばかりの僧侶。1990年春のことです。

☆高野暮らし

高野山は、お坊さんたちだけが暮らしている町ではありません。山内には役場も病院も、銀行もコンビニもあります。生活に困ることはありませんが、それでもやはり山深い場所にある町ですから、不便なことも少なくない。当時は運転免許を持っていなかったので、麓の街に買い物に行くこともできず、麓から登って来る行商のトラックが頼りでした。借りた家には狭いけれど庭もあり、ここで野菜を作ったりもしましたが、冬は雪で覆われてしまいます。

初めての冬休みに、車の免許を取りました。山に籠もっていても仕方がないと、家人も大阪の大学に通うことになり、高野暮らしはわずか1年で区切りをつけ、麓の橋本に転居しました。なんと免許取りたての身で、片道1時間の高野山に、2年間通いました。だからいまでも、高速道路なんかより、危険で細い山道の運転の方が得意です。

つたない修士論文をなんとか提出して、鳴門にやって来たのは、'91年の春でした。

初代通信

◆参拝旅行20年史

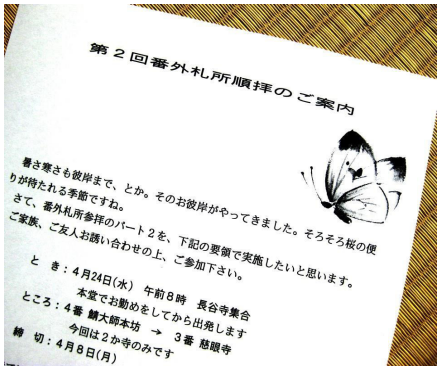
鳴門結衆では毎年、初夏と秋の2度、参拝旅行をしています。かつては、年に1度は泊をともなっていましたが、いまは日帰りだけになっています。それでも参加者は随分減りました。

その結衆の参拝旅行の担当者として企画・運営に携わるうち、他の寺の檀信徒たちとの混成の参拝をどこか物足りなく感じ、長谷寺の仲間たちだけで参拝に行きたいと思うようになりました。

そこで始めたのが、四国別格霊場20か寺の参拝で、'96年の春と初夏と秋、'97年の春と初夏の5度で結願し、その秋に高野山にお礼参りをして、閉じました。

ところで'97年の秋といえば、先住夫人小塩和子の急逝で、寺は危機的な局面を迎えた時期です。せっかく始めた参拝旅行も、わずか2年で潰えてしまうのかと思いました。しかしそれから2年経ち、ひとり欠けた体制にも慣れ、'99年の大法会を何とか乗り切ることができました。

そこで翌2000年から、施餓鬼会で供養した経木を納めるための、高野山参拝を始めました。この参拝は、結局11年続き、夏を閉じる恒例の行事になりました。マンネリにならないよう、必ず帰路に別の寺や名所に立寄ったり、新仏さんの出た家を誘ったり、いろいろ工夫をしたものです。


第２回番外札所順拝のご案内

暑さ寒さも彼岸まで、とか。そのお彼岸がやってきました。そろそろ桜の便りが待たれる季節ですね。
さて、番外札所参拝のパート２を、下記の要領で実施したいと思います。
ご家族、ご友人お誘い合わせの上、ご参加下さい。

と　き：4月24日(水)　午前8時　長谷寺集合
本堂でお勤めをしてから出発します
ところ：4番 鯖大師本坊 → 3番 慈願寺
今回は2か寺のみです
締　切：4月8日(月)

懐かしい番外参拝のチラシを見つけました。1996年初夏のものです。

またこれとは別に、長谷寺の本尊のルーツを訪ねて琵琶湖の周辺を訪ねたり、世界遺産登録を記念してご開帳された吉野金峯山寺の蔵王権現に会いに行ったりもしました。

夏の高野山詣では、施餓鬼会の経木の廃止によって'10年で閉じ、翌'11年から'14年まで4年かけて四国霊場巡拝。そしてそのお礼参りを兼ねて、今回の開創法要参加ということになったわけです。

振り返ってみれば、途中2年のブランクはあったものの、長谷寺の「団参時代」は20年の時を重ねたことになります。この参拝に加わったことが縁で、寺に親しく出入りし、様々な局面で力を貸して下さる方も現れました。

記録を繙いてみると、この20年間に、1000人近い方々と、お参りをご一緒したことになります。

さて、先代住職も年老いて、私も寺を留守にしにくくなり、そろそろこの企画も幕を下ろす頃合なのかなと感じています。そんなことを思いながらの高野山でしたが、お四国の参加者から、またどこか連れて行って下さい、などと言われてしまいました。キリのいいところだからと幕を閉じてしまうのではなく、機会と素材に恵まれたら、また行きましょう、ということにしておきます。

発行　長谷寺
編集　祐信
〒772-0004
鳴門市撫養町木津 1037-1
電話 088－686－2450
ﾌｧｸｽ 088－686－2130
E-Mail
cho_kuma@mwb.biglobe.ne.jp
URL
http://www.chokokuji.jp/